4 自らの学びの姿を知り、次の学びに向かう熊本の子供たちに！

～子供と教師のための効果的な学力向上検証改善サイクルの確立～

本章の概略

● 本県は、独自の評価問題「ゆうチャレンジ」を開発し、平成15年度から熊本県学力調査（以下、「県学力調査」という。）として実施してきました。この県学力調査は、基礎的・基本的な知識及び技能とともに、学習意欲や思考力・判断力・表現力等までを問う評価問題と、児童生徒及び教師の学力向上に向けた取組状況を把握する質問紙調査で構成されており、平成19年度の全国学力・学習状況調査の開始に先駆けて行った歴史と実績をもっています。

● 平成31年4月の「熊本の学びの提言」では、県学力調査について、「調査問題そのものが授業改善の参考になる」、「校内研究の取組の検証を行う一つの指標となる」、「小学校第３学年から実施されており、各市町村教育委員会の学力向上対策を早い時期から検証できる」など、個々の教師、学校、行政のそれぞれの立場に大きく貢献していることが成果としてあげられました。その上で、「採点の客観的妥当性」、「一人一人の児童生徒のより詳細な課題の把握」、「調査問題を基にした課題克服のための時間確保」が、今後の課題として発展的に指摘されています。

● このような県学力調査に対するこれまでの成果を踏まえ、本章では、上記の課題の発展的解決に向け、新たに開発した「熊本県学力・学習状況調査」について、その実施の意図及び活用の方法について整理をします。

熊本県学力・学習状況調査実施の意図

● 熊本県学力・学習状況調査を実施する意図は次のとおりです。

・児童生徒　　：自身の学びを振り返り、次の学びに向かうための「道しるべ」とする。
・学校（教師）：教育指導の成果と課題を検証し、その改善を図る。
・教育委員会　：教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

● このように、児童生徒にとっては、自身の状況を的確に把握し、次の学びに向かうための道しるべとなり、学校および行政にとっては、児童生徒の学力を保障するための継続的な検証改善サイクルを確立するための起点となるのが熊本県学力・学習状況調査です。

● このような視座に立った時、調査結果はこれまで以上にきめ細かに示されるとともに、そのデータは、より客観的で信頼できるものでなければなりません。そして、教師は、新しい熊本県学力・学習状況調査により生み出された時間と提供された資料を基に、今、目の前にいる児童生徒の課題に応じた最適な授業改善及び課題克服の取組に注力できるようになります。

● そこで本章では、基本方針「子供と教師のための効果的な学力向上検証改善サイクルの確立」に基づき、次の２点を重点として、各学校が取り組む上で参考となるよう、それぞれを四つのステップで説明します。以下、その具体的な内容を述べていきます。

重点１　子供たちの課題克服に向けた教師の授業（単元）デザインにつなげましょう

● 実態把握及び評価（Check）は、結果を信頼性のあるものとするため、同じ採点基準で採点を行い、調査結果を客観的な根拠資料として提供します。また、質問紙調査を同時に行い、子供たちの学習状況を学習習慣や生活習慣との相関から、より詳細に捉えることができる県学力・学習状況調査を目指していきます。

● この県学力・学習状況調査の実施後に提供される詳細な分析資料から、教師は児童生徒の課題解決のために、「何を学ぶとよいか」に加え、「どのように学ぶとよいか」までも併せて指導することが可能となります。学校総体で分析(Action)し、指導計画に位置付け（Plan）ていくことで、児童生徒に必要な資質・能力の育成に向けた「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善を行っていく（Do）ことが可能となります。

● 学校総体でよりよい授業（単元）をデザインするためのＰＤＣＡサイクルを確立することによって、子供たちが自分の学びの姿を知り、日々たゆまず、自ら学び続ける「熊本の学び」を支えることができます。

ステップ①　熊本県学力・学習状況調査の実施（Check）

質問紙調査も同時に実施し、一人一人の学習状況を明らかにする。

↓

ステップ②　結果を基に実態把握・分析（Action）

全体の傾向等、必要な情報を選んで分析し、実態を把握する。

↓

ステップ③　目標及び授業（単元）のデザインの立案（Plan）

分析から成果と課題を見出し、実態に応じたよりよい授業（単元）をデザインする。

↓

ステップ④　授業（単元）のデザインを基にプラン実行（Do）

Web上のプリント等を活用し、クラスだけでなく個人の課題克服も目指す。

ステップ①　熊本県学力・学習状況調査の実施

○　児童生徒の課題克服に注力する。

教師が、調査実施後の課題克服に注力できるよう、一括した採点、入力、分析等を可能にしました。このことで、学力・学習状況が客観的に把握でき信頼性が高まることが期待できます。学力調査に加えて、児童生徒がこれまでの学び方や生活状況を振り返り、これからの学びに生かせるような質問紙調査を実施し、学力調査との相関関係を確かめられるものにしていきます。学力調査と質問紙調査から明らかになった一人一人の学習状況とそれに対する学習へのアドバイスが、個人票で示されます。これらにより明らかになった課題を克服することに注力しましょう。

○　学習状況を明らかにするための質問紙調査を行う。

質問紙調査では、全国学力・学習状況調査と調査項目を合わせ、同じ内容の質問を児童生徒と教師の両者から調査することで、児童生徒と学校が目指すべき姿を共有することができます。４月から１２月までの本年度の児童生徒の意識の変容を確認し、課題解決に向かっているかを確認するとともに、全国学力・学習状況調査の実施教科以外は、年度末までにいかに改善するか、方向性と取組を決定するようにしましょう。

■質問紙調査の具体例（児童生徒用）

・あなたは、授業で難しい内容を勉強したり、難しい問題に挑戦したりする時間をもっと増やしてほしいと思いますか。

■質問紙調査の質問項目例（教師用）

・あなたの授業では、児童生徒の理解の状況や習熟の程度に応じて補充的な学習や発展的な学習を行うなど、個に応じた指導の充実が図られていますか。

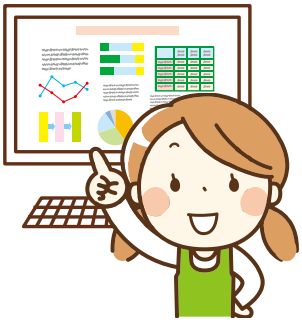
ステップ②　結果を基に実態把握・分析

○　授業改善へ向け、様々な視点から達成度を把握する。

民間のノウハウを活用することで、課題がある問題の洗い出しと解答傾向の分析が容易になります。分析結果から課題克服に向けた授業改善が可能となります。

例えば、記述問題で解答例とそのパターンに当てはまる実際の解答を確かめることができるようになり、誤答しやすいポイントや傾向を具体的に把握し、実態に即した授業改善に役立てることができます。

○　分析シートを目的に応じて活用する。



学級、学年、学校と必要な場面に合わせて分析シートを準備することができます。学級の分析シートに「図に表すこと」「図をもとに説明すること」などの学級の課題が明記されれば、日々の授業で必要な学び方を含めて、授業そのものを見つめ直す具体策を検討することができます。領域や観点ごとの結果だけではない、日々の授業で意識すべきポイントが、学校・学年・学級等の必要な範囲で明らかになり、作業の効率を高め、結果分析を授業改善へとつなげやすくなります。

ステップ③　目標及び授業（単元）のデザインの立案

校内研修で
学びの姿を共有

調査問題自体から・・・
○教師が問題を実際に解き、子供のつまずきを共有
○自分の授業の中で、どのように具現化するかを決定
調査結果分析から・・・
○研究テーマ、仮説、手立ての設定
○結果分析をもとにした研究や仮説の検証
質問紙調査結果分析から・・・
○学習態度や学び方に関する共通理解
○学級経営案等への位置付け　　等

学校全体で
共通実践

日々の授業実践や研究授業で・・・
○学校全体の課題を踏まえた共通実践とその検証
特設として・・・
○帯時間等での課題克服プリントの有効活用
○つまずき克服月間の設定　　等

それぞれの
学級で

日々の授業実践や研究授業で・・・
○学校全体の課題を踏まえた共通実践、検証
○「説明する」「図に表す」等、学び方における学級の課題を踏まえた実践
○日常的に国語辞典を使用する等、基礎基本における学級の課題を踏まえた実践
質問紙調査から・・・
○「どのように学ぶか」についての自覚化
○学び合いでの約束決め
○児童生徒で決定したことを掲示　　等

今後、指定校などの先進的な取組の収集・発信により、授業改善の好事例を紹介することで、授業改善の具体的な姿を県全体で共有することができるようになります。また、過去の県学力調査（ゆうチャレンジ）問題等を活用することにより、授業前後の実態把握の充実が期待されます。日々の授業において「どのように学ぶか」を明確にしながら授業デザインを行うことを推進していきます。

ステップ④　授業（単元）のデザインを基にプラン実行

○　一人一人の学習状況に対応した復習問題で課題を克服する。

一人一人のつまずきが明らかになるため、個別の指導の在り方を明確にすることができます。これまで、新学年の新しい担任・担当となった教師は、目の前にいる児童生徒の前学年までのつまずきが見えにくい状況にありました。しかし、個人票及び結果資料等があることにより、焦点化した内容で個別の指導が可能となります。また、家庭とも連携し、つまずきに即した個に応じた家庭学習を推進していくことも可能となります。

○　学級や学年全体の学習状況に対応した学習プリントを活用する。

学習状況調査の正答率や誤答パターン等から、一人一人への対応だけでなく、学習集団の課題にあった教材を提供することができるようになります。児童生徒自身が自ら課題克服のためにプリント等を活用して取り組めるように、課題克服プリントやWebの活用、時間の確保等の学習環境の充実を図りましょう。必要な内容を選択し、ダウンロードすることで、復習プリントが作成され、プリントアウトするだけですぐに利用が可能となります。

同じ問題に学校全体として取り組むことで、児童生徒が互いに学び合う姿を期待することができます。

○　ステップ③④の例

実践例）小学校　国語

【出題のねらい】（H28年度　3年）

「ボール」「ポール」「ホール」を辞書に出てくる順番に正しく並べかえること。

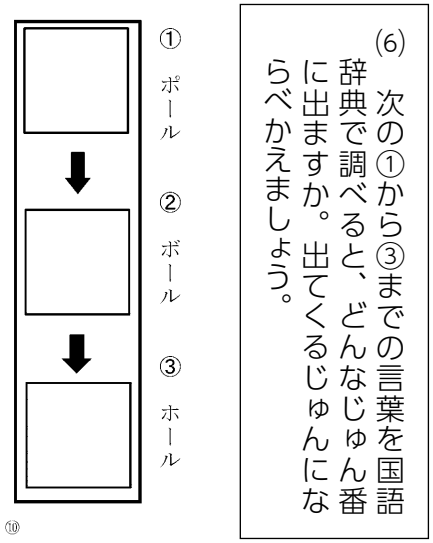
【指導のポイント】

・国語辞典に触れる場を１時間毎に設定。

・子供に問題を作成させ、出題させる場を準備する活動。

【取組】

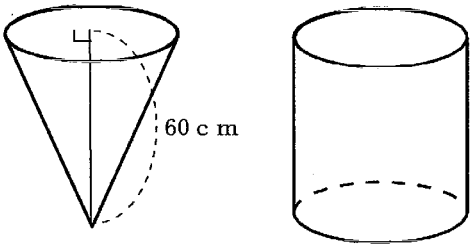
国語の授業で必ず一回は辞書を引く場面を設定します。意味調べも兼ねて、濁音・清音・拗音・促音等の組合せで問うことで、辞書に慣れるだけでなく、語彙指導の充実も図ることができるようになります。



実践例）中学校　数学

(7)　下の図は，円すいと円柱の形をした容器です。それぞれの容器の底面は合同な円で，高さは６０ｃｍで等しいことが分かっています。

この円すいの容器いっぱいに入れた水を円柱の容器に移したとき，円柱の容器に入った水の高さは何ｃｍになるか答えなさい。　⑩



【出題のねらい】円柱と円錐の体積の関係について理解していること。

〔県全体定着率３８.０％〕

【指導のポイント】

・柱体と錐体の体積の関係を予想し、模型を用いた実験で確かめる活動。

・「錐体の体積の３倍が柱体の体積」「柱体の体積の１／３倍が錐体の体積」となることを表現する活動。

【取組】

これまでの柱体と錐体の体積の関係についての授業では、水を使った実験を行ってきましたが、新たに、３色のビーズを使った教材も使用しました。そのことにより、生徒たちは「柱体の体積の１／３が錐体の体積」というイメージをもつことができるようになります。

重点２　子供たちが自らの学びをデザインできるようにしましょう

- 「学び」は、児童生徒一人一人の中にあります。熊本県のすべての子供たちが自分の学びの姿を知り、日々たゆまず、自ら学ぶことを支えるための県学力・学習状況調査を実施します。

- 教師と同様、本調査を起点として、児童生徒の学びにもＰＤＣＡサイクルの確立を促しましょう。児童生徒は昨年度の結果を意識しながら調査問題に取り組みます（Check）。その後、過去の個人票の結果比較等をもとに、教師とともに個の学びを振り返ります (Action)。さらに、学びの振り返りをもとに課題克服のための自分の学びの計画を立てます（Plan）。その計画をもとに、家庭学習に自分自身の課題を取り入れたり、個の課題に応じた克服プリント等を活用したりすることへつなげます（Do）。

- 児童生徒が、本調査を起点としたＰＤＣＡサイクルのもとで、自身の学び方や生活を見つめ、自身で課題を解決するよう、自分に合った学び方や学習方法を身に付けていく一連の過程を学びのデザインとします。そうすることで「能動的に学び続ける力」の育成を支えていきます。

ステップ①　熊本県学力・学習状況調査の実施（Check）

学力調査と質問紙調査から一人一人の学習状況を、個人票で示す。

↓

ステップ②　個人票から成果と課題を分析（Action）

経年変化で学習の状況を見つめ、学習や生活の習慣との関連を教師とともに分析する。

↓

ステップ③　目標及び自ら実行すべきことの計画（Plan）

次の目標を定め、よりよい学び方や生活の仕方を教師とともに考える。

↓

ステップ④　次の自分の目標へ向け、計画を実行（Do）

目標の実現に向け、Web上のプリント等を活用し、自ら課題克服を目指す。

ステップ①　熊本県学力・学習状況調査の実施

○　一人一人の学びを見つめ、振り返ることができる個人票

児童生徒が自分自身の課題を把握し、自ら課題を克服しようとするためには、個人の結果を表した個人票の充実が欠かせません。学力調査と質問紙調査から個々の学習状況を明らかにし、個々の学びの成長を可視化し、自ら学びの振り返りを促し、PDCAサイクルで自らの学びをデザインできる県学力・学習状況調査を目指します。

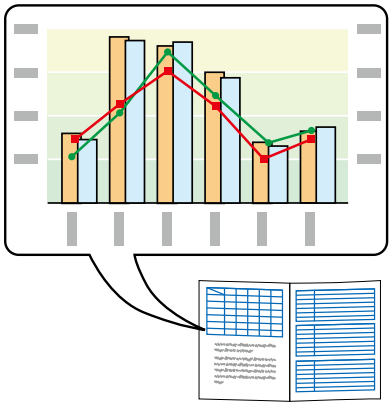
■ 個人票の特徴 ■

① 教科別の結果が一覧できる表とグラフで示されます。
② 教科別結果は、問題の内容ごとに正答率が示され、達成状況が分かります。
苦手部分には、解決の方法や学習のアドバイスが示されます。
③ 過去の調査結果との比較ができ、学習状況の推移を見ることができます。
④ 学習習慣や生活習慣から日々の生活や学習の課題が示されます。

ステップ②・③　成果と課題の分析と自ら実行すべきことの計画

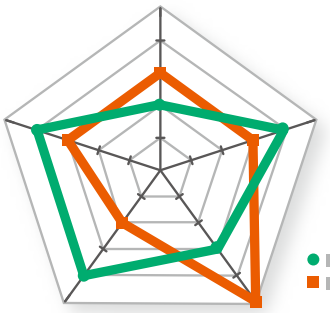
○　経年変化の可視化

昨年度までの結果が分かる個人票により、児童生徒がこれまでの1年間の学習の方法を見つめ直す機会となり、家庭学習などにおける今後の学習方法を考えることができます。学習状況を経年変化で見ることで、「来年は・・・」「次の課題は・・・」と具体的な目標をもち、取り組むことにもつながります。教師は、この子供たちの取組のプロセスを認めていきましょう。



○　課題となる問題内容の明確化

領域だけではなく具体的な問題内容での結果が分かる個人票により、自分が努力すべきものが明確になります。問題内容の結果により、児童生徒が克服すべき課題に気付き、課題解決に向けて家庭学習等で取り組むことができるようになります。



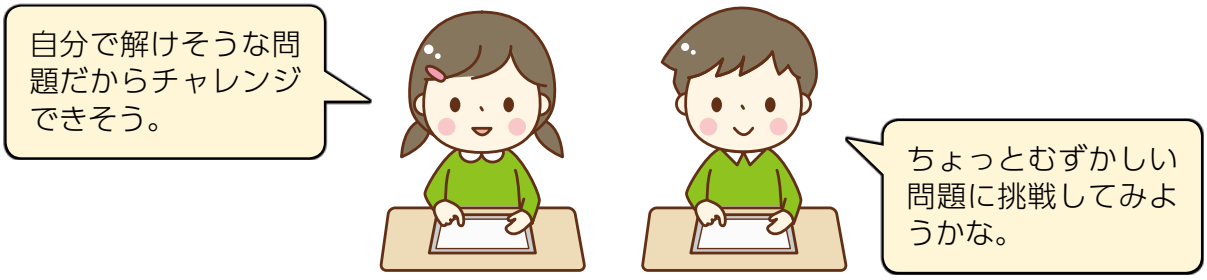
○　学習や生活の習慣の改善

同時に実施する質問紙調査により、実生活の様子との関連が明らかになり、学校生活だけでなく家庭生活を含め、学習や生活習慣の改善を目指すことができます。

ステップ④　次の自分の目標へ向け、計画の実行

○　一人一人の学習状況に対応した学習プリントの活用

調査結果から見えた課題を解決するためのプリントが、個々の状況に応じ、Web等を通じて提供されます。それぞれの課題に応じたきめ細かな復習問題が提供されることで、児童生徒自ら課題の解決に向かう等の主体的に学ぶ姿が期待できます。また、十分な定着が見られる児童生徒に対応した難易度の高い問題も提供され、更に力を伸ばすこともできるようになります。個人票の分析をもとにした目標設定と学習計画とともに、一人一人の学習状況に対応した課題克服プリントの活用により、児童生徒に「課題を克服する自主学習」という意識を高め、日々の学習習慣や家庭学習をよりよいものへと高めることにつながります。



○　家庭との連携

個人票や質問紙調査の結果を児童生徒や保護者とともに分析することもできます。三者で、児童生徒の成長を確認したり、学習面や生活面の具体的な課題と改善策を考えたりすることで、これからの児童生徒の学びのデザインを共有できます。また、このことが課題を克服する家庭学習につながります。

○さらには・・・・

学校全体として日々の学習習慣や家庭学習をよりよいものへと高めたいときは、個別に、あるいは学年や教科で課題に応じた問題の一覧表や冊子を工夫して作成し、それを使った家庭学習に取り組むこともできます。教師に与えられた課題に取り組むだけの家庭学習から「自分の課題を克服するための自主学習」となり、より主体的な学習ができ、自ら学び続ける児童生徒の育成につながります。

今後の展望～熊本県学力･学習状況調査のより一層の活用のために～

小学校第３学年から実施する意図

● 本調査を小学校第３学年から実施する意図は、従来の「熊本県学力調査」(ゆうチャレンジ）同様、子供の学力の差が顕著になるとされる９歳（小学校第３学年）から、子供の実態をきめ細かに把握し、できるだけ早い段階から苦手の問題や課題に対して、個に応じた指導を充実させるためです。

● 今回の調査では、児童生徒の個々の学力及び学習の状況を継続的に捉えることが可能となります。このことで、一人一人の子供の状況を「認め、ほめ、励まし、伸ばす」ことがより可能となり、生涯にわたって学びに向かう力を伸ばすことを目指しています。

熊本県学力・学習状況調査のより一層の活用

● 各学校、市町村教育委員会、県教育委員会における、児童生徒一人一人の課題克服の取組の充実及び児童生徒の主体的な学習態度の育成等に資するものとなるよう本調査は実施されます。

● この詳細なデータを有効に活用し、学校はカリキュラム・マネジメントに生かして、学校総体としてどのように取り組むのか、市町村教育委員会は実態に応じた施策構築にどのように生かすかが、今後重要となります。

● また、本調査の実施後に「つまずき克服月間」等、一定の期間を設け、家庭・地域とともに取り組むなどの活用方法も考えられます。

● すべての児童生徒の学びの質を高めるため、基礎的・基本的な知識及び技能を徹底して身に付けさせ、課題解決に向けて能動的に学ぶ熊本の授業づくりの理念の下、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を推進するものとして本調査を活用した取組がより一層充実することを期待しています。